

演劇インターンシップについて

奥 村 義 博

企業や地方公共団体、NPO などを受け入れ先とするインターンシップは、カリキュラムの一部として松山大学でもすっかり定着しているが、ここで言う演劇インターンシップとは、筆者のゼミが過去 4 年間にわたり行っている活動を指す。すなわち、地域で活躍している劇団にゼミ生を一定期間受け入れていただき、スタッフの一員として公演の全過程に関与させていただくのである。

ゼミで演劇公演を行うことの意味について、筆者はこれまでに二度考察を加えている。英語での公演の語学教育的側面を概括的に明らかにしようとしたのが、「英語劇上演をめぐる――第一回ゼミ公演から――」（『言語文化研究』第 24 巻第 1 号）であり、その文学教育的側面と人間教育的側面を全体的に展望しようとしたのが、「演劇公演の教育的効果をめぐって――第二回ゼミ公演から――」（『言語文化研究』第 25 巻第 2 号）である。だが、いずれも芝居を作り上演することの教育力を扱ったため、インターンシップについては言及するにとどめざるを得なかった。

筆者のゼミは英米文学専攻であって、演劇専攻ではない。ほとんどのゼミ生が舞台芸術については全くの白紙の状態でゼミに入ってくると言って良いし、筆者自身もまた演劇の専門家ではない。このような純然たるアマチュア集団が 5 年間にわたり日本語劇／英語劇公演を打ち、高い評価を得ることができているのは、ひとえにこの演劇インターンシップのお蔭に他ならない。

筆者のゼミにとってきわめて大きな意味を持つ演劇インターンシップであるが、誕生の経緯からすると、地域演劇における大事件の副産物といえることができる。すなわち、「正岡子規 100 年祭記念事業」（実行委員長中村時広松山市

長)のひとつとして記念演劇「深き森、赤き鳥居のその下に」(作・演出 高瀬久男 [文学座])が市民参加のかたちでプロデュースされていなければ、演劇インターンシップのアイデアさえ生まれていなかったかもしれない。

また、筆者のゼミにとってどれほど有意義であっても、劇団にとってもプラス面がなければ、演劇インターンシップが続いているはずがない。そのような意味では、筆者のゼミの試みは、他の英米演劇ゼミの、そして地域演劇の、ひとつのモデルとなり得ると考える。

この報告では、最も理想的な形態で行われた1回目のインターンシップの概要を紹介するとともに、4年間の経験をもとに、インターンシップの結果を左右するキーファクターを明らかにしておきたい。

1

「深き森、赤き鳥居のその下に」には、4月21日に行われたオーディションを経て、22人の市民がキャストとして参加した。そのなかには、「ヴォイス」「オフィス59」「クロニクル」の三劇団の主宰者と劇団員が含まれていたほか、神戸の劇団「ヴァダ」に属していながら、転勤で松山に居を移していた榊形浩ますかたひろ人もいた。地域での他の有力劇団では、「くす」がスタッフとして公演を支える側にまわった一方、「無限蒸気社」は第七回公演の日程の都合で参加を見合わせていた。

この記念演劇以前には、地域の劇団が合同するような機会はなかった。その意味で、正岡子規100年祭は、松山の各劇団が横のつながりや合同の可能性を意識する契機となったのであるが、それ以上に意義深かったのが、高瀬久男が与えたインパクトである。愛媛新聞は、それを後に次のような記事にしている。当事者の内面に踏み込んで状況を活写しているので、長くなるが引用する。

シリーズ「自立」2004 えひめ

第18話 演劇で食う 2

「仕事辞めアマを卒業」

「ああ楽しかったと終わるだけの演劇ではなく、一週間くらいたって、あのシーンはどういう意味だったんだろうと思い出してもらえるような、観客の心にひっかかる演劇をやりたい」

2001年夏のある日、文学座の高瀬久男（46）の演出による子規百年祭記念演劇のけいこを終えた後、役者の一人、榊形浩人（37）は高瀬にこう打ち明けた。

突き放した答えが返ってきた。「昼間、別の仕事をしているようでは、そんな演劇はつくれない」

■

■

当時の松山市の演劇状況を演劇批評誌「ふぉるむ」はこう書いている。「演じる側も見er側も、“身内感覚”にどっぷりとつかりすぎているようだ」。10以上のアマ劇団があったが、ほとんどが趣味の発表会程度のレベル。唯我独尊に走りがちで、他者としての観客を念頭に置いた演劇は乏しかった。

あくまで演劇愛好家の集まりにすぎず、それで食べているわけではないから、当然といえば当然。榊形自身、出身地の神戸市で外食チェーンの店長をしていた20代半ばからアマ演劇の舞台に立ってきたが、けいこや公演は仕事を終えた後や休日。あくまで「趣味の演劇」であり、面白ければ、楽しければそれでいい、と割り切っていた。

転職が訪れた。01年1月、当時勤務していた金融会社の転勤で松山市に。たまたま子規演劇の開催を知った。友人から高瀬の評判を聞かされ、「そんなにすごい人なら。めったにないチャンス」と、オーディションを受けた。首尾よく合格。すべてを吸収してやろうと思ったが、生半可な気

持ちでは通用しないとすぐ悟った。自分の出番シーン以外の代役もすぐできるよう、集中したけいこを求める高瀬。その真剣な指導に圧倒された。

■

■

高瀬の言葉は、榊形の心に重くわだかまっていた。やりとりから約1年たった02年8月、榊形は勤めを辞めた。

「演劇で食っていく」。高瀬への答えだった。

「高瀬さんという本物に触れることで、松山の演劇人に演劇がいかに真剣なものか感じてもらい、現状を見直すきっかけになってほしい、と願っていました」(子規演劇の関係者)。仕掛けた側の狙い以上の行動だった。

榊形はその年の11月、自分の劇団を結成。1ヶ月後には、別の劇団にいた梶原剛(34)とともに、「まつやまアーツマネジメント」(MAM)を設立した。制作や興行など演劇全般に関するマネジメント組織。演劇をビジネス化する際の母体に、と考えていた。

演劇で生活していくのは難しい。東京でさえ、それができるのは一握り。多くの役者はアルバイトで生計を立てている。まして地方では――。

だが、あまり不安はなかった。職を転々とし、無職の時代には有り金わずか数千円という「根源的な恐怖」を経験したこともある。「何とかなるだろう」。生来楽天的な性格でもあった。

「演劇のスキルを生かし、仕事にしたい。表現者と社会をつなぐ窓口に」。榊形は昼間から演劇のことを考えられる立場に身を置いた。(文化部越智考至記者)¹⁾

記事の最後に登場する梶原は、劇作家古川洋太郎とともに、「無限蒸気社」を支える中核メンバーである。1996年7月に結成された劇団「再生遊園地」を前身とし、「地域性を生かした特色溢れる自作台本を上演し続けること」を目的に2000年に創立された「無限蒸気社」は、地域劇団で唯一自前で稽古場を確保するなど、演劇に対する志の大変高い劇団である。榊形と梶原、劇団

「PS. みそ汁定食」と「無限蒸気社」の急接近と、その結果としてのMAM（まつやまアーツマネジメント）の設立は、必然の流れであった。

この結びつきからまず生まれたのが、2002年11月に稽古場（アトリエ・サードピア）で行われた「mamatrixⅢ」（演劇・ダンス・バンド・DJ・VJ・造形作家コラボレーションイベント）であった。「無限蒸気社」らしい反リアリズムのスタイルをとりながらも、分かりやすいエンターテインメントに仕上がったパフォーマンスで、新たな観客層を開拓することもできたようである。

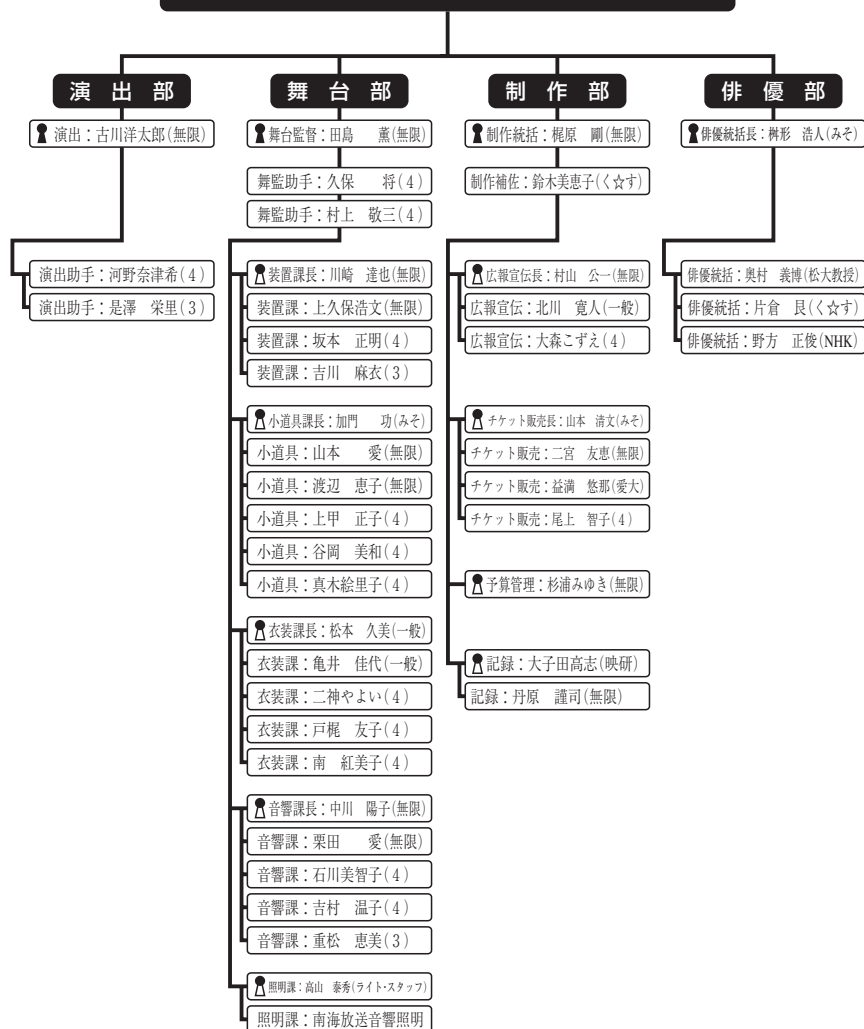
榊形からカルフルホールの使用条件について筆者が問い合わせを受けたのは、「mamatrixⅢ」の成功よりずっと前のことである。市民演劇で共演して以来懇意にしていたからであるが、聞けば、古川による創作劇を「PS. みそ汁定食」「無限蒸気社」「くす」それに一般市民を加えて公演することを考えているという。その時とっさに思い出したのが、二人のゼミ生、竹原裕子と日野友美子のことであった。二人は第一回ゼミ公演に先立ち、自主的に「くす」の「父と暮せば」公演に参加していたが、その効果には大いに刮目させられていた。芝居作りに取り組む真剣な姿勢を身につけたばかりか、演技・演出にも驚くほど豊かな目を培っていたのである。第一回ゼミ公演でゼミ生のモチベーションの温度差に悩まされていた時だけに、榊形の計画は願ったりかなったりのチャンスのように思えた。第二回ゼミ公演のゼミ生全員を参加させて貰うことができれば、芝居作りのプロセスが一変するであろう。また筆者自身も現場で様々なことが吸収できる。

筆者の提案は簡単に受け入れられた訳ではない。劇団側には躊躇もあったようであるが、最終的に「奥村ゼミ」「PS. みそ汁定食」「無限蒸気社」「くす」とロックバンドQJ、一般市民からなるユニットが結成されたのは、やはり、市民演劇に触発された地域の演劇人の成長への熱い思いがあったからであろう。子規百年祭に続く変化の連鎖反応のなかで実現した刺激的な企画。そのような含意から筆者がユニットに「セレンディピティー」と命名したが、メンバーはそれを「幸福な偶然」と言いならわした。筆者のゼミにとっては、ユニットは

「ころがる太陽」5月公演組織図

▼SERENDIPITY 2003 PRESENTS▼

SERENDIPITY 「ころがる太陽」



まさに「幸福な偶然」であった。

「セレンディピティー」は、1月29日の初顔合わせから活動を開始した。その組織は左図の通りであった。(4)は4年生、(3)は3年生を表している。因みに筆者は俳優に名を連ねさせていただいている。

2

初顔合わせから99日目の5月8日、「ころがる太陽」は初日をあげた。11日までの5ステージで750人以上の観客を動員した。約500人のキャパシティを持つカルフルホールを使用した割には少人数のように思われるかもしれないが、これは芝居のスタイルに合わせてホールの中に小劇場風の空間を特設したことによる。余裕がなく入場をお断りした方も大勢いた。

演劇インターンシップの方も、筆者の予想や期待をはるかに上まわる成果を上げた。ゼミ生の貢献と活躍を直接提示することができないのは口惜しいが、幸いその文章は残っている。お客様へのメッセージを書かせ、The Antarctic Newsと銘打って筆者が配付したものである。長くはなるが、ケーススタディーの要諦であるし、貴重な一次資料なので、あえて全てを収録しておく。

真木絵里子 このような素晴らしい企画に参加できて本当によかったと思います。私たちが今年する演劇の勉強だけでなく、人との触れ合いや、皆でひとつのものを作り上げていく中での心の一体感を学べて人生勉強にもなりました。またこういう機会があればぜひとも参加してみたいな。

一生懸命みんなで心をひとつにして作り上げた劇です。涙、笑い、感動と最高のものになっているので是非楽しんで観て下さい。

南 紅美子 何かを作ったり、人を何か感動させたり笑わせたりするには、相当の体力と energy が必要のだと改めて思った。さまざまな background を持つ人たちに会うことができて充実した時間が持てた。結果も大事だけど、

過程を楽しむということができたのでよかった。

3ヶ月程前から準備しましたが、1時間半はあっという間の舞台だと思います。お客様、劇に関わった人一人一人にとって必然だと思えるような舞台であればいいなと思っています。

谷岡 美和 一日一日、一瞬一瞬が貴重であると感じた4ヶ月でした。Serendipity から第一に得たものは出会いがいかに素晴らしいかということ。21年間知らなかった世界に飛び込んで多くの人に出会い、全てが新鮮で楽しくてしょうがない4ヶ月でした。小道具課の仕事に取り組むうち、受動的な気持ちでいた Serendipity に責任感が生まれました。日々、話し合い、意見を出し合う中で積極的に話ができるようになりました。ゼミ生とは友情が深まり励ましあえる関係が生まれました。Serendipity スタッフ全員が一致団結し溶け合い公演を成功させようとしてきた4ヶ月で私は確実に成長できたと自信をもって言えます。この場を与えて下さり貴重な経験をさせて頂いた Serendipity 全員の方に感謝の気持ちで一杯です。

観客の皆さんには、目で見て、耳で聞いて、声を出して笑って楽しんで頂きたい。そして、Serendipity スタッフ全員が伝えたい思いを心で感じて頂けたらと…。テーマは冒険心。演劇は予想以上の奥深いものです。

二神やよい 大変満足です。時間的にはしんどいこともあるけれど、参加してよかったです。ゼミの仲間と仲良くなれました。いろんな人と知り合いになりました。違う価値観を持つ人と話すのは、刺激になって素晴らしい。就職活動にプラスになりました。大学では部活動に入っていないため、無償でここまで頑張ったのが久しぶりで、高校時代の時のような熱い感じがする。

この公演に関わって、自分を成長させることができ、自分の嫌な面も認められるようになってきました。この劇を見て、お客様も何か自分に関して得るものがあたらよいなと思います。私達も楽しんできたので、皆さんも楽しんで下さい。あっぱれ。

上甲 正子 この冒険で私は飛べました。多くの人に出会い、多くのことを学

び、大きく成長した気がします。毎晩の深夜におよぶ練習もいつの間にか苦にならなくなり、バイトよりも就職活動よりも Serendipity。すっかり dipity 色に染まってしまいました。Serendipity（幸運な偶然）に感謝!! ご来場下さった皆様もきっとこの偶然に出会えたことを幸せにおもわれることでしょう。この偶然が再び訪れますように。

河野奈津希 何もかもが初めての経験でした。私は演出助手をやらせて頂いていますが、知識も経験もないので、劇団の方々にご迷惑をおかけしています。しかも人並み以上にとろいので…。二月から劇団の方たちと一緒に過ごしてきて思ったことがあります。それは、みなさん、自分というものを持っている事です。私は今まで適当に毎日を過ごしてきました。Serendipity に参加するようになって、「私でも力になりたい」「がんばりたい」という思いが強まり、毎日充実した日々を送るようになりました。この機会を与えて下さった奥村先生に感謝しております。

「ころがる太陽」は、はっきり言って、最高です。役者さん達の表情一つ一つを是非見て下さい！ 皆さん、嫌な事も全部忘れて腹の底から笑いましょう!!

吉川 麻衣 今回 Serendipity に参加させて頂いて、自分自身大きく成長することができたと思います。一つのことを皆で力を合わせて頑張ることの大切さ、続けることの大切さその他色々得たものは計り知れないです。これらの良い経験は全て Serendipity が私たちに起きたから得ることが出来たもののだという事を忘れずに、最後まで力を合わせてがんばりたいと思います。

二月から今日まで、お客さまに最高の舞台を見てもらうために、劇団員、ゼミ生が、力をあわせて頑張りました。この劇を見て「冒険心とは何か?」「生きるということは何か?」というものを感じ取って下さったら幸いです。

是澤 栄里 私は演劇をしたことはもちろん見たこともありませんでした。興味がなかったわけではなく、機会がなかったのです。そして今回の Serendipity でチャンスがめぐってきました。しかも、作品を発表する立場としてです。

当然私は素人で、「おもしろそうだ」という興味本位の参加だったので、初め劇団の方々の真剣な様子にはとまどいと驚きを感じました。その上、演出助手という大役まですることとなり、不安でいっぱいでした。しかし、いざ作品が始まると、発見の連続で、自分の未知の世界にすることが楽しくなりました。お手伝いをするというよりは迷惑をかけてしまった気もするのですが、自分自身、いろいろな意味で成長できたんじゃないかと感じています。

作品は、学生の意見が取り入れられたりと、工夫が凝らされていて、楽しめること間違いなしです。

久保 将 本当に貴重な経験をさせていただき、感謝しています。普通の大学生生活を送っていれば、こんな経験はできなかったと思います。色々な面で成長させていただきました。そして、改めてこの機会を与えてくれた奥村先生、ともに活動して下さった劇団の方々に感謝します。

個々人の感想は様々だと思いますが、ただ純粋に芝居を楽しんで下さい。本日はありがとうございました。

坂本 正明 何もかもが初めての経験だったので劇団の方々には迷惑をかけっぱなしでした。また、僕達ゼミ生の芝居に対する気持ちも高まり、非常に感謝しています。

Serendipity 万歳！

皆さん、本日は「ころがる太陽」を見に来てくださりありがとうございました。この公演に対する熱い想いを体全体で感じ取って下さい。

村上 敬三 今回のイベントは僕の想像を超えていた。ゼロ、何もない状態から、何かを創造するということの素晴らしさと難しさを感じることができ、少しでも体感することができたことを、嬉しく思う。

特に、演劇といういわば、音、光、ストーリー、演技、チラシやチケットの作成といった総合的な Art の制作を直に Staff の一員として行動でき、普段テレビやイベントで気にもめず何げなく見ていた one scene に、どれだけの労力と時間が費やされているかを、痛感することができた。もちろん僕

の知る以上の様々な人々の協力や関係が、このイベントを動かしていることは、当然のことだろう。そして、その協力や関係がどれだけ大切かということとを、この機会を通して学ばせてもらった。感謝します。

正直言って、僕がこのイベントのためにできたことは、本当に小さなことで、誰もが気がつかない一部だ。でも、その一部分のために、じぶんのできる限りのことは、短い時間であっても、力を入れた。そんな短い時間の中でも僕はこれから続く人生の中での豊かなものに出会えた。お客様も、この舞台を通して、豊かなものと出会っていただけたらと思う。

大森こずえ 私は、広報宣伝課として Serendipity に参加させてもらいました。色々な店や友人に「ころがる太陽」の宣伝をしていました。ある日、友人に本公演の話をしていたら、「あんた、本当、嬉しそうな顔しとるね」と言われました。とにかく私はこの芝居が好きで、皆のことも大好きだから、仕事が楽しくてしょうがないくらいでした。メンバーは皆すごく魅力的で、本当にかっこいい大人は、一生懸命で何かにうちこめる人なのだと教えられました。

「ころがる太陽」はすごく熱い芝居です。お客様が、今、ここに、座っていただくまさにこのことが、Serendipity だと思います！ 今日何か熱いものを感じて頂けたら、あなたも自らの胸の高鳴りに耳を傾けて下さい。きっと忘れかけていた冒険心をもう一度見つけ出すことができると思います。

吉村 温子 この「ころがる太陽」にスタッフとして参加して思ったこと、それは夢中になれるものがあるってすごい、夢中になっている人はかっこいい！ ということです。スタッフ、役者の中には社会人が多く、皆さん仕事を終えられ疲れているにもかかわらず、ひたむきに練習、作業をされているのを見て、いつも「すごいなあ」と思っていました。私自身、現在就職活動をしていて、社会人になるという現実と理想の間で揺れています。就職するにあたり、仕事に追われ自分のやりたい事が二の次になってしまうのではと不安に思っていました。しかし自分が好きなことを、仕事をしながらでもやり通し、素晴らしいものを作っていけるのだと分かり、心強いです。私も本

当に夢中になれるものを見つけないです。

皆さん、とにかく笑え、感動できます。楽しんで下さい！

石川美智子 一つのものを作り上げる中で、それに携わる人間がそれぞれの目標を持って、着実に一步一步進んでいる姿を目の当たりにしてきました。ここで得たものや出会いの大きさは、何物にもかえがたく、貴重なものとなりました。

尾上 智子 芝居のことなど何も知らなかった私が、奥村ゼミに入ったことにより、今回このようなすばらしい企画に参加することができました。本当に芝居のことは何もわからない私で皆さんに沢山ご迷惑をおかけしました。でも、今まで見る側だけだった私にとって、この経験は本当に新鮮なもので、また未知なるものでした。また、この企画を通して出会った人たちはみんなとても魅力的で素敵な人ばかりで、沢山の刺激や影響を受けました。今回の Serendipity で出会うことのできた皆さんには本当に感謝しています。

本日、Serendipity「ころがる太陽」にお越し頂いた皆さん、本当に有難うございます。最近いいことないなという人も、毎日何かに追われて疲れている人も、今悩みのある人も、この時間だけは全てを忘れて、ご覧下さい。終わるころには、きっと何かが変わっているはずです。

戸梶 友子 いつもは見る側で、出来上がった劇を見にゆくという立場の私が、初めて作り上げる側として参加したのが、今回の Serendipity です。当然ある程度の内容は想像してのぞんでいたのですが、考えるのとやるのとでは大違い!! こんなにたくさんの人が動いて、こんなにたくさんをこなして出来上がっていくもののだとは、正直思っていませんでした。色々なことが新鮮だったし、何よりも色々な人と出会えたことがうれしかった! それぞれに任された役割の中に、それぞれの思いや試行錯誤があってやっと出来上がった一つの劇、「ころがる太陽」。絶対素晴らしいものができたはずです!! 個人的にはあれやこれやと後悔もありますが、有意義な時間であったと思います! この作品の主題でもある「冒険心」。私も恐がらず、いろん

なことにチャレンジしていきたいです！ Rolling sun ダア !!!

舞台というのは演じる側と見る側の二つがあって初めて成り立つものです。一つの空間を皆さんと共有できたらと思います。一緒に目いっぱい楽しんでいってくださいね！

3

「セレンディピティー」でのインターンシップが筆者の期待以上の成果をあげたことには、幾つかの理由があったように思われる。それらについて、順次光を当ててみたい。

① 脚本の執筆段階からゼミ生が関与したこと

通常、脚本は一人の作者によって書かれるが、黒澤明のように2～3人で書く場合もある。「セレンディピティー」では、その結成のいきさつに相应しく、古川洋太郎は何と全員参加の創作方法に挑戦した。下表は稽古計画の一部である。エチュードやディスカッションからアイデアを集団的に発展させるプロセ

第2クール稽古計画

		稽 古 内 容	全体予定
2月17日	月	休み	
2月18日	火	大まかな台本を元にしたエチュード	
2月19日	水		
2月20日	木	休み	
2月21日	金	ブリザードが始まった以降のシーンのエチュード	
2月22日	土		
2月23日	日	休み	
2月24日	月	前半部分までの台本ディスカッション	
2月25日	火	休み	
2月26日	水	中盤にいくまでの台本ディスカッション	
2月27日	木		
2月28日	金	台本説明	台本完成
3月1日	土		
3月2日	日		

スが見てとれる。

作品の統一上、出てきた提案を全て取り入れることは不可能にせよ、このような意欲的な実験が、脚本の創作に参加する希有な機会をゼミ生に与えたこと、そのことによりゼミ生の「セレンディピティー」に対する主体的関与がより深いものとなったことは言うまでもない。

② 脚本がゼミ生にアピールしたこと

「ころがる太陽」について愛媛新聞は次のように書いている。

2003年5月、松山市で演劇関係者の注目を集めた公演があった。…仕掛けたのは、「まつやまアーツマネジメント」を設立した梶形浩人と梶原剛だ。「今までになかった形式で、良質のエンターテインメントをつくりたい」

結果は大成功だった。「愛媛演劇界のいいとこ取り」。地元の演劇批評誌はこう評した。

演劇の固定ファンだけではなく、新たな客を開拓したい。そのためには、何といってもまず面白くなければ——。二人の考えは一致する²⁾

「ころがる太陽」は、まさしく、面白い良質のエンターテインメントとなっていた。「セレンディピティー」という企てが冒険であるのに合わせるかのように、芝居のテーマは冒険心。南極基地の一画に閉じ込められ超常現象に直面した人間達が、これでもかと言わんばかりのギャグと事件の嵐を通して生き生きと描き出される。そして笑いとサスペンスは、やがて冒険心へのオマージュへと収束する。アテ書きのキャラクターといい、舞台のスピーディーかつ大胆な使い方といい、見る人の視線を釘付けにせずにはおかなかった。The Antarctic Newsからは、ゼミ生のこの芝居への入れ込み様が容易に見てとれる。

関わっている作品への愛着があって、初めて主体的な創意工夫や献身的な努力もうまれてくる。インターンシップを能動的なものとするうえで、作品の磁

力ほど大切なものは他にないのである。

③ 劇団員がゼミ生にとってエンカレジメントそのものであったこと

大学時代は大抵の学生にとってモラトリアムの時期であろう。時に友人達と大いに盛りあがることがあったとしても、心の底では自己に対する頼りなさを常を感じている不安な時期。これがいわゆる青春時代ではないか。

不安な若者にとって何より重要な存在が、生きることにに対する意欲と活力をひき出してくれる人間である。「セレンディピティー」には、ゼミ生がそのような人物と理想的なかたちで出会うことのできる条件が整っていた。

すでに述べたように、「セレンディピティー」は地域演劇に新風を吹きこもうとする冒険であった。劇団員の挑む心が手で触れることすらできそうな濃い空気となって、稽古場に充満していた。その空気を呼吸するうちに、ゼミ生にも情熱が乗り移っていった。劇団員は多くがアルバイトで生計を立てる不安定な身分であったが、それが彼等の生き方をより輝かしいものとしていた。

また、「セレンディピティー」の核となる劇団員は30歳代であった。芝居に人生を賭ける思いから、ゼミ生にも妥協を許さなかったが、厳しく接するだけではなく、エンターテインメントを志す人間にふさわしいユーモアとコミュニケーション能力で、ゼミ生に愉快的兄貴として接していた。稽古場日誌をのぞいてみると、例えば次のような文章が残されている。ゼミ生の劇団員に対する尊敬と親愛の情が伝わってくる。

◆ 4月19日 本日のお題：カルフルにて!!!



松山大学奥村ゼミ、久保将であります。

今日は本番の舞台であります松山大学カルフルにて練習をしました。実寸での舞台は思ったより広がった。客席との距離は近かった。これからまた舞台製作の練り直しだ！ えー、年々記憶力が低下しておりその日のこ

とすら思い出せなくなっている私ですが、ご了承願います。

舞台監督助手の私は朝8時15分に稽古場に行き、カルフルへの搬入のために色々荷物を積み込む作業をしていました。演出の古川さん、舞台監督の田島さんはさすがにとっくの前にきていました。さすがですな!! 最近強く思うのですが、劇団の人たちは凄い!! ほんとに!! その内容は多すぎて言えませんが、そこには計り知れない下積みと努力があるんですよ!! いやー感慨無量です。

とにかく、今日一日は全体の把握もでき、今後すべき事もわかり、大収穫でした。これからが大変なのも見えてきたのですが…。大変なのはみんな一緒。全員でいいものを作りたい。みんなにいいものを伝えたい。それだけです。皆さん期待しててください。

◆4月20日 本日のお題：最近の稽古場事情



初めまして、小道具課の谷岡美和、21歳です。毎日1時間かけて稽古場まで来てます。

最近私生活では、ホントに毎日何もなくて、現在私の生きがいは、稽古場で喋ることです。おかげ様で大変貴重な出会いをさせて頂き毎日感動の連続です。小道具課のお食事は、いつも急ぎまわってるので、会話がなくなっちゃってる…。夜は、皆さんが差し入れをして下さるので…。

小道具状況は、毎日稽古後の話し合いの甲斐あって、準備が着々と進んでおり、感心して頂いております。特に作り物は、ホントに大ざっぱさがたまらなくて、今になってやり直しなんかもありつつ…。

とりあえず、ホント毎日が楽しい☆きつと終わってしまうと淋しくて泣いちゃう…。

もう後少し、頑張りますのでよろしくお願いします。

◆ 4月25日



こんにちは。私、河野奈津希と申します！ 演出助手をやらせていただいて2ヶ月…やばいっす仕事覚えられないっす…でも一つだけ発見しました！ 古川さんはかわいってことです。擬音語ばかり発する古川さんは容赦なくおもしろいです。ナツとエリック（もう一人の演出助手）は、いつも笑わせてもらってます…

稽古中いつもナツは一人で大笑いしてるんですがいいんでしょうか…もうちょっと音量を落とそうと思ってるんですが難しいんですよ。最近は笑うのを必死で我慢してます…今柊形さんが私の所にきました。柊形さんとからむのもおもしろいっす！ 何かとつつこんでくるんで油断できないです。もっとおもしろいことを言えるようにがんばります！ そしていつか必ず剛さんの鼻をあかしてやります!! 見てくださいよ～

ではでは…また会う日まで。

効果的なエンカレジメントが成立するためには、与える側がスキルや情熱で模範的でさえあれば良いという訳ではない。与えられる側から見て、そこが自分の居場所であると確信できるようなアットホームな関係が必要なのはである。年齢やキャラクターの面で、「セレンディピティー」のメンバーは、エンカレジャーとしてまさに理想的な人物達であった。

④ ゼミ担当教員が参加していること

演劇の現場についての経験不足を痛感していた筆者は、キャストのオーディションに参加し、ペンギンの着ぐるみを着て演じることになった。ゼミ生は、私が劇団員にまじって芝居作りに汗を流しているところをずっと目にすることになったのである。

インターンシップの成功にとって、このことの意味は決して小さくはなかつ

たはずである。

大学生は多忙である。授業以外の時間はプライベートとアルバイトでびっしり埋まっている。おまけに「ころがる太陽」の稽古期間は、就職活動のピークと重なっていた。このような時期に、教員が一方的にインターンシップをゼミ生に押しつけても、教育として何ら説得力を持ち得ない。犠牲を伴うことであるからこそ、教員が率先して真剣に取り組む必要がある。

しかし、筆者はペンギンの役を演じることを心底楽しんでいて、作る過程が真剣ではあっても、芝居の本質は play である。普段、教壇に立っている人間が下手なりに play の楽しさを経験しているところを見ることが、演劇に対するゼミ生の姿勢を活力にあふれたものとする一助となったと言え、手前味噌が過ぎようか。

4

以上見てきたように、「セレンディピティー」はゼミ生たちに理想的なインターンシップを提供してくれた。では、インターンシップには劇団側にとってはどのような意味があったのだろうか。

「ころがる太陽」が上演された年の9月7日に、「えひめ市民活動サポーターズ会議」(代表菊池修氏)によって「えひめのNPO 事業成果発表会」が松山市総合福祉センターで開催された。『えひめのNPO 活動を伝えよう!! 他の組織・機関と目的や活動を共有し、成果を上げている例を募集します』という呼びかけに応じて14団体が応募したが、「まつやまアーツマネジメント」もその一つに名前を連ねていた。そして、劇団員とともにゼミ生もプレゼンテーションを行った成果発表会で、「まつやまアーツマネジメント」は最優秀2団体の一つに輝いたのである。インターンシップに対する、劇団の、そして地域社会の高い評価を何より如実に示す受賞であった。

劇団側の評価を客観的に知るために格好の資料がある。応募14団体から選

ばれた6団体が発表に先立って提出した事例報告概要シートである。

団体別事例報告概要シート

〈団体名：まつやまアーツマネジメント〉

発表テーマ：資金調達 OR 協働 (いずれかをご記入ください)

事業概要

松山市内の三劇団と、松山大学奥村ゼミの学生、教授が参加して、創作演劇を上演した。自己満足に終わるのではなく、観客に楽しんでもらえるレベルの高い作品作りを目標とした。

また、大学生が授業の一環として、この事業に取り組むことにより単位を与え、演劇が持つ力を教育に活かそうとした。

当初のねらい

- ① 松山に於いて精力的に活動している三つの劇団が、それぞれの表現方法をぶつけ合い、そこから今までにない新たな演劇の型の創造を狙った
- ② 新たな型の公演を行うことによって、話題性を引き起こし、この地域に新しい刺激を与え、さらなる演劇人口、観劇人口の拡大を狙った
- ③ レベルの高い創作現場を学生たちに体験させる事によって、また、身体での表現というものを体感することによって得られる教育効果を狙った

目標

5回公演毎回満席(150席×5回)、スポンサー数32件の獲得、助成金の取得(愛媛文化のニューウェーブ作り振興基金)、授業として最後まで公演をやり通すことによる単位の修得

結果

まず、公演自体に成功があった。全く新しい作劇方法のため、当初は役者、スタッフに戸惑いもあり、手探り状態であったが、やり方が分かってくると、いい意味での相乗効果が生まれ、今までになかった面白さと感動を与える舞台となった。

また、5回の公演のいずれもが満席状態で、チケットも完売。数多くのメディアで取り上げられ、公演終了後も様々な問い合わせや、オファーがあった。

そして、何と言っても、関わった学生たちの大きな変化と成長があった事だろう。幕が下り、拍手の渦の中、舞台裏で抱き合い、感激に涙する学生たちの目は、一つの芸術を創りあげた達成感と、自信に満ちあふれていた。

成果として評価している点

新しい型の作品作りは、思わぬ成果を上げた。劇団同士での方法論のぶつけ合いだけでなく、今まで全く演劇というものに携わってこなかったゼミの学生たちの意見が思わぬ発見や展開を呼び起こし、今まで、良くも悪くも「演劇」というジャンルの内側しか見ることの出来なかった演劇人の視点を広げてくれた。

教育効果は驚くほどの成果であった。始めは受動的であった学生たちが、責任と役割を与えることによって、練習が進んでいくに従って見違えるほどに生き生きと参加するようになっていき、意見やアイデアを積極的に出すようになっていた。

また、この公演を通じて、改めて父親の仕事について考えたという学生や、就職活動の面接などに堂々と臨めるようになったという学生もいた。また、何人かは公演終了後も演劇に興味を持ち、市内の劇団に入団した学

生もいた。表現というものを実体験することによって、これほどの教育効果があるのだという事に、表現者である我々自身が驚いたし、励みになった。

よかった点、悪かった点

学生たちを学生としてでなく、あくまで同じ、質の高い舞台を創る上での仲間として、厳しいこともたくさん言ったが、一人の大人として扱ったのは、学生の教育効果的に良かったのではないか。だが、三劇団とゼミの学生という様々な考え方、芝居に取り組む熱意の違いを持つ者を一つにまとめ上げて、同じ方向を向かせるまでに、思ったよりも時間がかかってしまった。もう少しその事を始めから予測してすりあわせのための方法をあらかじめ考えておくべきであった。

成功のコツ、ポイント

何よりも、ただ単に演劇を体験するというような市民演劇的な型ではなく、質の高い表現、アートを創る、目指すという高い目的意識を持たせたことだろう。だからこそ、新しい演劇の型を生み出せたとし、学生もそのプレッシャーの中で成長していったと思う³⁾。

以上のようにインターンシップは高い評価を与えられているが、どれほど良いことにもコインの裏側に相当する〈現実〉というものがある。サポーターズ会議は‘協働’の相手方へのヒアリングも実施し、文書として残しているが、まつやま NPO センターの石丸英章氏はその総評で次のように述べている。

4. 総評

学生へのヒアリングをすることで、演劇の持つ教育効果を確認することができた。最初はとまどいがあった学生達も具体的な方向が見え始めると、次第に自分の役割を認識し、責任を担うことで積極的になっていったという。

演劇と教育の関係は近年注目されており、協働による活動を継続してほしいが、学生は一年ごとに代わっていくなど、演劇に関するノウハウの蓄積が難しいと考えられ、相手先の負担が続くことが考えられる。

学生によるゼミ集大成としての演劇は今後も続けていくとのことであるが、記録を残し伝えることでノウハウの蓄積が可能になる。今後の課題として、後輩へのノウハウ伝達などを考える必要があるのではないかと感じた。

また、学生にとっては広報や広告依頼などの役割だけでは演劇体験が少なくなり、本来の英米文学科としての文学解釈能力育成にはつながりにくい。文学解釈の体験のためには、もっと舞台に立つ経験を積ませる必要があると考えられる⁴⁾。

指摘されている問題点は次のようなことである。

① ゼミ生は1年毎に入れ替わるので、初心者を一から教える劇団側の負担は続く。

② キャストとして参加できなければ文学解釈能力の向上にはつながらない。

いずれもきわめて妥当な問題提起である。インターンシップを継続してゆくのであれば、常に念頭に置いておくべき永遠の課題であろう。ただ、②に関しては、たとえスタッフとしてのみの参加であっても、ゼミ生が文学解釈とは異なったかたちでイメージーションを働かせることを学ぶことは、指摘しておかねばならない。筆者は「演劇公演の教育的効果をめぐって—第二回ゼミ公演から—」において、演劇を作る過程で人が働かせるイメージーションを文学解釈

におけるそれと区別し、その特徴として「外在化」「構造化」「広場化」をあげた。キャストとして参加することができればこうしたイマジネーションの働かせ方を肉体を通して学ぶことができようが、稽古に真剣に取り組む限り、スタッフとしての参加であっても、ゼミ生は文学解釈のそれとは相補的なイマジネーションの働かせ方をしっかり学ぶことができるのである。

①に関しては劇団側の御意見を直接うかがう他はない。奥村ゼミは、「一初恋」「楽屋」「哀しいくらいがちょうどいい」「橋を渡ったら泣け」とすでに4公演にわたって劇団「PS. みそ汁定食」にインターンシップをお願いしているが、劇団側の負担について主宰は次のような回答をよせられている。

結論から申し上げますと、負担であるとは全く感じておりません。むしろ右も左も分からない世界に放り込まれた、学生さんの負担が大きいのではないのでしょうか？

芝居は有料無料を問わず、お客さんに観て頂かなければ始まりません。ですから芝居創りを知らない学生さんの目に私たちの演技がどう映るのか、学生さんの感性に私たちが創っている舞台がどう受け止められるのか、常に新鮮な意見を貰いながらの稽古はとても刺激的です。

そしてスタッフのサポートとして戦力になってくれるのも有難いですね。大道具ひとつ作るにしても人手がいる作業ですから。

また、舞台創りを経験し芝居に興味を持って、そのまま演劇ファンになってくれる学生さんがいるということです。

少しでも演劇ファンを増やし、観客層を厚くすることにも一役買っていると思います。

学生さんはこのインターンシップで演劇づくりを経験し、やがて自分たちだけの力で公演します。その本番を見届けて私たちの公演はようやく終わるのです。全く演劇に興味のなかった学生たちが舞台の上で生き生きと演じ、お客様から拍手を貰って流す涙を見るとき、本当に彼らと共に芝居

創りが出来て良かったと思います。

演劇インターンシップは劇団と大学の求め合うものがぴったりとかみ合った素晴らしいシステムだと考えます。

梶形 浩人

5

冒頭で、筆者のゼミの試みは、英米演劇文学ゼミと地域演劇との協働のひとつのモデルたりうると述べた。1回目のインターンシップの総括より、筆者の主張は十分裏付けられると考える。

日本全国には英米演劇を扱う文学ゼミがどれくらいあるだろう。仮にその10分の1が文学+演劇ゼミとなれば、インパクトは計り知れない。文学研究の面が不十分になるという問題点はあるにせよ、演劇教育がほぼ完全に欠落している日本の大学事情を考えれば、非常識な提案とは言えないと思う。

また、大学における教育の重要性がますますクローズアップされてきている一方で、文学研究には一時期のような求心力が失われているように思えてならない。戯曲という現場と直結しているテキストを本来の場所に戻して扱うことは、文学教育と研究に新鮮な風を吹きこみ、かつ人間教育に新たな地平を拓くことを可能にするはずである。

註

- 1) 愛媛新聞 2004 年 5 月 11 日。
- 2) 愛媛新聞 2004 年 5 月 14 日。
- 3) えひめ市民活動サポーターズ会議「えひめの NPO 事業成果発表会報告書」53～4 頁。
- 4) 上掲書 33 頁。

(本稿は、平成 16 年度に交付を受けた松山大学教育研究助成の成果の一部である)